



社会福祉法人サンフレンズ 法人設立 20 周年記念ブック





サンフレンズの芽生えはここから…

『杉並・老後を良くする会』『友愛の灯協会』『新しいホームをつくる会』と
『社会福祉法人サンフレンズ』の本部が同居していた『ゆうホーム松ノ木』
(松ノ木 3-16-12／1992 年撮影)

社会福祉法人サンフレンズ設立 20 周年記念ブック

－目次－

設立趣意書		4
理念・基本方針		5
写真でつづるサンフレンズの歴史		6
ご寄稿集		9
サンフレンズマークはこうして決まった		14
サンフレンズの歌（三つの友達）		15

社会福祉法人「サンフレンズ」

設 立 趣 意 書

高齢化社会の到来が注目され始めた 1972 年、“住みなれた地域で人間らしい生を全うすることができる福祉の在りかた”を実現させたいとねがって、「杉並・老後を良くする会」が誕生しました。77 年には、この会を母体として社団法人「友愛の灯協会」を設立し、84 年には、「新しいホームをつくる会」を発足させました。

その後、三つの会は、“食・医・住”の三本の柱にそって、それぞれの活動、運動と事業をすすめ、かつ日常的に連携しながら共通の目標に向かい協力し合っていました。

しかし、社会的には急速な高齢化と核家族化、共働きの増加や住宅事情の悪化など、高齢者の生活上の問題とくに介護の問題は非常に厳しい状況となってきました。

また、1990 年代に入り、行政の面では国から自治体へ社会福祉の権限委譲がすすみ、とくに 93 年度には、区市町村が保健福祉の計画を立て、責任をもってそれを実施していくことになりました。杉並区においても、住みなれた地域で安心して老後を暮らせるよう多くの施策を講じ、高齢者在宅サービスセンターの増設や特別養護老人ホームなどの建設も計画されております。

こうした時期にあたり、住民の主体性、および行政と民間の相互理解と、より良い協力関係とを基盤とし、自治体と住民が社会福祉の責任を共に担う時代にふさわしい、創造的な新しい施設運営に取り組むことが、いちだんと必要になったと考えます。

そこで、私たちは三つの会の総力をあげ、1994 年度、杉並区和田および和泉高齢者在宅サービスセンターなどの運営委託を受けて、地域に開かれ、住民に支えられる運営を行い、さらに 21 世紀へ向け、より先進的な役割を果たしていくことを目的として、社会福祉法人「サンフレンズ」の設立を計画しました。

これによって、今後の高齢社会における望ましい福祉の増進に、いっそう寄与したいと志すものであります。

1994 年 4 月 1 日

理事長 一番ヶ瀬康子

理事	浅 賀 祥 一
〃	岡 本 波津子
〃	河 周 子
〃	笹 原 典 子
〃	白 川 すみ子
〃	高 橋 史 子
〃	土 屋 一
〃	中 川 晶 輝
〃	山 崎 和 一

監事	桜 井 里 二
〃	古 畑 徳 宝

社会福祉法人「サンフレンズ」の理念

●できるだけ自由に

- 画一的、管理的にならず、一人ひとりがその人らしく生きられる。

●どこまでも対等に

- 一人ひとりの人権を尊重し、全ての人が、上下関係でなく付き合える。

●他者への思いを生かし合う

- 地域社会で共に生きる人びとの連帯、地球環境、平和への願いを大切にする。



社会福祉法人「サンフレンズ」の運営方針

- ◆利用者のプライバシーと自立を尊重し、自己実現を助けることを、一人ひとりの立場に立って行います。
- ◆利用者、家族、職員、ボランティア、理事者などお互いの立場を尊重し、民主的運営を行います。
- ◆他のグループや世代間の交流をはかり、生活の質を高め、地域の福祉文化の拠点となることをめざします。

写真でつづるサンフレンズの歴史

※参考資料：「杉並・老後を良くする会奮戦記 年表」「杉並・老後を良くする会 40 周年記念特集号」
「一番ヶ瀬康子先生を偲ぶ会 式次第」「社会福祉 vol.35：一番ヶ瀬康子教授退職記念号」

年	サンフレンズの動き	社会の動向
1993 年 (平成 5 年)	●『杉並・老後を良くする会』『友愛の灯協会』『新しいホームをつくる会』の三団体による社会福祉法人設立準備委員会発足。	バブル崩壊
1994 年 (平成 6 年)	●社会福祉法人サンフレンズ設立認可。三団体が永年積み上げた実績、人材、基金などのすべてを結集。住民立社会福祉法人として国内第一号。 ●初代理事長に一番ヶ瀬康子氏が就任。 ●和田高齢者在宅サービスセンター事業を運営。 ●和泉高齢者在宅サービスセンター開所。 ●『サンフレンズ応援団』発足。	高齢化率 14%／ 21 世紀福祉ビジョン／新ゴールドプラン／社会保障制度審議会勧告（95 年勧告）／高齢社会対策基本法



(写真左) 設立を祝う集いで講演する一番ヶ瀬初代理事長。記念講演のテーマは「福祉を創り、文化を拓く」でした。

(写真上) 初めての乾杯。

(写真下左) 設立を祝う集いのフィナーレで歌う理事長、そして河理事、白川理事、岡本理事の通称「サン婆」。

(写真下右) 新しい船出の激励にかけつけてくださった会場の皆さんも、一緒に歌っていただきました。たくさんの元気をいただきました。



年	サンフレンズの動き	社会の動向
1995 年 (平成 7 年)	●区立特別養護老人ホームの運営受託を理事会で決定。受託準備推進委員会を設置し、杉並区との折衝開始。	阪神・淡路大震災
1996 年 (平成 8 年)	●区立特養開設準備室設置。 ●特養推進委員会設置。	
1997 年 (平成 9 年)	●松ノ木ふれあいの家開所。 ●上井草園、上井草ふれあいの家開所。 ●在宅介護支援センターケア 24 上井草受託運営開始。 ●四団体（三団体とサンフレンズ）の今後を考える会『四葉の会』発足。	消費税 5%／介護保険法成立



(写真上) 上井草園、上井草ふれあいの家、ケア 24
上井草の開設にあたっての新入職員入職式。みんな若く、希望に燃えていました。

(写真左) サンフレンズ上井草開所当時の建物外観

(写真下左) 初めての餅つき会

(写真下右) 初めての納涼祭

1998 年 (平成 10 年)	●オンブズパーソン制度設立準備委員会設置。 ●「杉並・老後を良くする会奮戦記」安田陸男著、出版。
---------------------	---

社会福祉基礎構造
改革について(中間
まとめ、追加意見)
／NPO 法



1999 年 (平成 11 年)	●サンフレンズ施設オンブズマン制度スタート。 ●サンフレンズ居宅介護支援センター開所。
---------------------	--

年	サンフレンズの動き	社会の動向
2000 年 (平成 12 年)	●介護保険事業開始。特別養護老人ホーム上井草園、高齢者在宅サービスセンターふれあいの家（和田・和泉・松ノ木・永福・上井草）、居宅介護支援センター（和田・和泉・松ノ木・永福・上井草）。	介護保険制度開始 ／社会福祉事業法 改正（社会福祉法）
2001 年 (平成 13 年)	●『杉並・老後を良くする会』わいわいプロジェクト発足。 サンフレンズ後援会について考える。	
2002 年 (平成 14 年)	●サンフレンズ後援会設立。 ●将来構想検討委員会設置。	ホームレス 自立支援法
2003 年 (平成 15 年)	●第 2 代理事長に大友信勝氏が就任。 (写真右) 左から佐野監事、大友新理事長、一番ヶ瀬前理事長、岡本理事、河理事	
2004 年 (平成 16 年)	●将来構想検討委員会最終報告。 ●特養、ショートステイ、ふれあいの家事業自主運営開始。 ●法人創立 10 周年記念式典。	
2005 年 (平成 17 年)	●個人情報保護制度検討委員会設置。 ●ホームページ開設。	介護保険法改正（地域包括支援センター）
2006 年 (平成 18 年)	●『友愛の灯協会』の訪問介護事業と居宅介護支援事業の 2 事業をサンフレンズに統合。『杉並・老後を良くする会』の配食サービスをサンフレンズに移行。 ●杉並区地域包括支援センターケア 24 上井草、ケア 24 善福寺の受託運営開始。ケア 24 上井草から居宅部分を独立させ、サンフレンズ居宅支援センターとする。	高齢者虐待防止法
2007 年 (平成 19 年)	●小規模特養サンフレンズ善福寺開所。(写真右) ●サンフレンズ上井草にボランティアコーディネーターを配置。	年金記録問題
2008 年 (平成 20 年)	●サンフレンズ和田・松ノ木・友愛支援センターを統合し、サンフレンズ新高円寺支援センターとして設置。 ●第 1 回『市民のつどい』開催	新型インフルエンザ大流行
2009 年 (平成 21 年)	●ボランティア受入方針についての研修開催。	
2010 年 (平成 22 年)	●サンフレンズ支援センターからサンフレンズ上井草支援センターに名称変更。	
2011 年 (平成 23 年)	●困った時の SOS 地域で恩送り事業開始。	3.11 東日本大震災
2012 年 (平成 24 年)	●第 3 代理事長に山田知子氏が就任。 ●サンフレンズ和泉・永福支援センターを統合し、サンフレンズ永福町支援センターとして設置。	
2013 年 (平成 25 年)	●第 4 代理事長に安藤雄太氏が就任。 ●杉並区立和田サービス付き高齢者住宅事業の受託運営開始。 ●サンフレンズ新高円寺・永福町支援センターを統合し、サンフレンズ和田堀支援センターとして設置。	アベノミクス
2014 年 (平成 26 年)	●上井草ふれあいの家 認知症対応型デイサービス休止。 ●杉並区見守り配食サービス受託終了。	消費税増税 5% から 8%へ

ご寄稿集

設立 20 周年に思う

元・東京都副知事 金平 輝子

社会福祉法人サンフレンズ設立 20 周年おめでとうございます。

この法人の歴史を語ろうとすると、どうしても、高齢家族の介護、看護を一手に引き受ける傍ら、高齢期にも住み慣れた地域で、人間らしい生活を求め続けた杉並の女性達の活動の歴史にさかのぼらざるを得ません。

女性達が、家族や地域の高齢者問題に向き合ったのは、法人設立よりさらに 20 年も前のことだったと、伺っています。戦後の復興と発展の陰で、この国の高齢化は、一気に進んでいきました。他国に例をみないスピードに行政の対応は遅れました。当時、杉並区に高齢担当課がなかったと、指摘されていますが、杉並が例外ではなかったのです。女性達は、自らの経験をもとに、さらに実態の調査を進め、識者と交わり、課題を掘り下げながら、行政の対応を求めていかれました。当法人の初代理事長一番ヶ瀬康子先生が、「待ったなしの状況が待っている時、飛び込むのが市民運動」と女性達を励まされたと伺いますが、そこから得られた珠玉の経験が、行政を動かし、住民立という新たな社会福祉法人の誕生になりました。

当時、私は東京都の福祉行政に関わり、人々の暮らしと福祉について考える立場にありました。高齢者問題は、あまりに大きな社会的課題であり、従来の狭い福祉で捉えられるものではないと必死だったのを覚えています。杉並の女性が始められた給食サービスの現場にもお邪魔し、実態と課題を真剣に学ばせて戴いたのが、昨日のことのよう思い出されます。

法人設立 20 年にあたり、当法人の職員の方々が、プロとして、高齢者を支える一方、同じ地域に生きる市民として、支え合って生きる実践者であり続けてほしい、と願って設立 20 周年のお祝いの言葉とさせていただきます。

サンフレンズ 20 周年に寄せて

杉並区保健福祉部長 長田 斎

社会福祉法人サンフレンズが設立 20 周年を迎えられたこと、心からお慶び申し上げます。また、この間、特別養護老人ホームやふれあいの家、地域包括支援センターの運営などを通して、杉並区の高齢者福祉の向上に多大な貢献をなされてきたことに対し、衷心より敬意と感謝の意を表します。

ご承知のようにサンフレンズは、平成 6 年、日本で初めての「住民団体を母体とする社会福祉法人」として設立されました。安心して老いられる地域づくりを目指した多くの人々の高い志と理念、実践のもとに誕生したサンフレンズ 20 年の歩みは、通算では 40 年を超える熱い住民活動の足跡の証であり、都市部における住民主体の地域福祉活動の歴史そのものであると認識しています。

さて、平成 12 年に開始した介護保険制度は、サービスの底辺を大きく広げるとともに、多くの担い手を誕生させてきました。しかし、その過程で、地域住民の志で支えられた多様な自主活動が、制度の狭間に飲み込まれていったことも事実です。そして今、さらなる高齢化と介護保険制度の制約のもと、改めて地域での見守りや日常生活を支援するインフォーマルなサービスの重要性が指摘されています。地域包括ケアを確立していくためには、多様な支えあいのサービスが必要なのです。この十数年の間、地域の力は高まったのか、そうではなかったのか、基礎自治体の担当者として忸怩たる思いがいたします。

最近では、社会福祉法人のあり方についても注目が集まっています。厚生労働省の検討会が先日取りまとめた報告書では、今後の社会福祉法人に期待される役割として、「地域における公益的な活動の推進」があげられています。この先、住民運動から生まれたサンフレンズが新たな地域活動を次々と生み出し、杉並の住民活動がより一層活性化していくための拠り所となっていただけのように、ますますのご発展とご活躍を祈念申し上げます。

社会福祉法人サンフレンズ 20 周年に寄せて

社会福祉法人杉並区社会福祉協議会会長 小林 義明

このたび、社会福祉法人サンフレンズが創立 20 周年を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。

サンフレンズは 1994 年の設立以来、その設立の母体であり、かつ、住民活動に端を発した「杉並・老後を良くする会」「友愛の灯協会」「新しいホームをつくる会」の、自分たちの老後をみんなと考え、良くしていこうという精神を引き継ぎ、地域の住民との共生を基盤とした事業運営に取り組まれてきたことは、誠に素晴らしく、心から敬意を表する次第でございます。

この 20 年は介護保険制度の導入をはじめとして、社会福祉を取り巻く環境が大きく変化していた時期でもありました。そのような時代背景の中で、サンフレンズは、利用者一人ひとりの個性を尊重した運営と地域社会との連携を運営方針として、杉並区の高齢者福祉をけん引してこられました。高齢者在宅サービスセンター（現ふれあいの家）や区立特別養護老人ホーム等では、地域の住民との協働のもと、区民目線での先進的な取組みを次々と展開し、一方では、区内の事業所合同の介護教室や連絡会の企画開催等、事業者のリーダーとしての役割も果たされてこられました。また、ボランティア活動や地域づくりの様々な場面では、私ども杉並区社会福祉協議会と日常的に連携し、杉並の地域福祉の充実、発展のための力強いパートナーとして活躍いただいております。

少子高齢化はさらに進展し、来るべき超高齢社会に向けて、地域における社会福祉法人の役割は、ますますその重要性を増していくことと思います。これからも、地域の人々とともに作り上げた伝統を基盤として、新たな福祉課題にも果敢に取り組んでいかれることを期待するとともに、社会福祉法人サンフレンズのますますのご発展と、関係者の皆さま方のより一層のご活躍を心からお祈り申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。

成人式！おめでとうございます

NPO 法人新しいホームをつくる会元理事 白川 すみ子

まずはじめに、心からの**感謝**を申し上げたいと思います。生まれと育ちが他の社会福祉法人とは違うため、どんなに厳しい試練とくにお金の面でのご苦労が大変だったことか、お察しいたします。代々の理事長と役職員の皆様、本当にお疲れさまでした。

そして、主人公であるご利用者の皆様と、法人内外からの支援に力を尽くして下さった方がたや、多くのボランティアの方たちも、長年の間ありがとうございました。おかげさまでハタチになったとはいえ、苦しい道のりは続くことでしょう。どうかこれからもよろしくお願い申し上げます。

……と述べながら、実は穴があったら入りたい思いの私です。設立の暫く前から都庁に通い、準備段階では河さん、岡本さんと数えきれない程区役所通いをしたものの、いざ出発進行、となって 4 年後胃癌の手術で理事を退任。『応援団』の拠点兼ねた『西荻あっとホーム』を 10 年維持するのがやっと、でした。

設立後もサンフレンズに尽くし続けてきた河さん、岡本さんや、とくに一番ケ瀬、大友両先生には足を向けて寝られない、**お詫び**の気持ちで一杯です。

今、80 の坂を越え、私たち 40 年余の仲間にとって 5 番目の会となる、本当に小さなボランティアグループの活動を始めて 2 年余りになります。人生のラストチャレンジといえる細ぼそとした歩みでも、目ざす理念は最も大きなサンフレンズと同じ、○できるだけ自由に ○どこまでも対等に ○他者への思いを生かし合う、という次第…。

感謝とお詫びの一方、勝手な**願望**ですが、成人後も、誰のための福祉、何のためのサービスか、という問いに応え得るサンフレンズであってほしい、と切に願っております。

社会福祉法人サンフレンズ 20 周年に寄せて

社会福祉法人サンフレンズ理事 大友 信勝

社会福祉法人サンフレンズの誕生は、安田陸男『杉並・老後を良くする会奮戦記』あけび書房、1998 年、に詳しい。安田は「住民立」の社会福祉法人の誕生だとして、自称「サンばば」の河周子（杉並・老後を良くする会）、岡本波津子（友愛の灯協会）、白川すみ子（新しいホームをつくる会）やサンフレンズ応援団の活動を述べている。この本はサンフレンズの原点を伝える文献として、これからも継承していく必要がある。

私がサンフレンズと関わるようになったのは、一番ヶ瀬康子（初代理事長）の勧めによる。東洋大学で 2 年間、同じ社会福祉学科に勤め、一番ヶ瀬が日本社会事業学校連盟会長をしていた時の事務局長が私だった。しかも高齢者福祉論の講義担当であったことから、「オンブズマン制度」をつくりたいのでやってほしいというものだった。私は 2000 年度にオーストラリア留学（1 年間）しており、サンフレンズを離れたが、帰国後に理事、そして任期が来ると理事長の依頼があった。

一番ヶ瀬に何を言われたか。サンフレンズは、お金はないが住民運動でつくった利用者中心の新しい社会福祉法人である。単なる介護施設の運営でなく、暮らしを支える地域の拠点として、オンブズマン制度の創設、職員研修の確立、人権保障の総合的展開を図り、社会福祉の歴史の 1 ページを創り出したいのだ、という趣旨だった。

サンフレンズは役職者の熱い志、杉並区のご理解やご支援、応援団の思いが伝わってくる組織であった。取り組んでみて難しかったのが、職員政策であった。この点は多くのドラマがあるが、次第に設立当時の若手職員が情熱と力量を発揮するようになり今日に至っている。実践を通して事業を発展させようと考えれば、困難に直面しているが、主体的力量も内部から育っており、大きな転換と新たな出発の時期に入っているのではないかと考えている。

理事長をしていた時期を振り返ってみると、介護保険の政策動向と法人の歩みを関連付けて分析、考察しておく必要があると考えている。特に、サンフレンズ善福寺（小規模特別養護老人ホーム）は法人としての基本財産、サービスの質のモデルを創出したい、法人の職員が専門性を磨く基盤をつくりだしたいと考え、地域コンフリクトもあったが取り組んだ。しかし、経営上の問題をはじめ、当初企画したように必ずしも進んでいない。これはなぜなのかについて検証が必要だと考えている。法人の設立理念や運営方針を今日的に深め、生かしながら新たな時代を切り拓く実践と研究が課題になっている。地域（利用者）、職員、役職者がお互いに力を合わせ、地域の拠点として発展させる契機に 20 周年の節目を位置づけ、乗り越えていきたいものである。



一歩先を行くのびやかなサンフレンズの未来に期待する

社会福祉法人サンフレンズ理事 山田 知子

70年代、住民たちが自分の問題として高齢者問題をとらえ解決すべく、地域に根差した活動を開始したころ、だれが法人を設立し、高齢者の施設をつくることを想像しただろう。その社会福祉法人サンフレンズが誕生してから20年になるとは、まず、その行動力に驚き、敬服する。社会福祉法人は世襲のところが少ない。また、戦前期から続く長い歴史をもった法人もある。そういう中で、住民の手によって一から作り上げられ、しかも、民主的で透明性の高い法人づくりが行われてきたというのは、誇るべき存在であり、福祉本来の姿ではないだろうか。

昨今は、社会福祉の世界にも市場化の波が押し寄せ、住民の手によるとか、民主的であるという価値より、経済効率が良いか悪いかが先行するようになっている。経済効率を否定するつもりはないが、効率が優先すると福祉はしばむ。それは、福祉が生身の人間の生活を相手にするものであるからであろう。

現代社会において、我々の生活は社会経済的変動の影響を強く受けるため、いつも不安定であり、予測できない事態に直面しやすい。とくに高齢期は予想できないことが次々と起こる。認知症を突然発症する、脳こうそくでマヒがのこる、配偶者を不治の病で失う、子どもとの確執、不和などで動揺しやすい。その生活を支え、どのような状況にあろうとも見捨てないのが社会福祉の本来の役割である。そこには効率の良い支援などないのである。あるのは、手間暇かけた安心をつくる生活支援だけである。

これまでは、少子高齢社会がいわれ、介護保険制度が始まり、それに対応する20年だったかもしれない。これからの10年、20年はどうか。人口急減社会の只中で、サンフレンズの役割はますます大きくなるはずである。民主的で透明性の高い運営、地域の住民から愛される存在、福祉の拠点のみならず文化の拠点としてこれからも存在感を示し続けてほしい。制度の枠を超え、常に一歩先を行くのびやかで創造的なサンフレンズの未来に期待している。

今だからこそ、知と文化による施設の社会化をめざして

社会福祉法人サンフレンズ理事長 安藤 雄太

サンフレンズが社会福祉法人としてスタートして20年目である。早いとみるか、ようやくとみるか、人によっては様々であろう。

人間に例えるならばハタチ、成人式である。これから大人の仲間入りと同時に、社会に対して義務が生じ、責任を負わなければならない。しかし、社会福祉法人は設立した時から、すでに社会的役割と責任を負っているのである。

サンフレンズが設立した1993年は、社会福祉分野においては施設から地域への流れであり、住民参加型在宅福祉サービスが着実に広がりを見せていた時期でもある。杉並・老後を良くする会、友愛の灯協会、新しいホームをつくる会は、まさに住民主体の地域福祉活動の本流であった。この流れを礎にサンフレンズが設立されてきた歴史は非常に意義深いものがある。

2000年の福祉制度改正に伴い、社会福祉事業法から社会福祉法へ改正され、介護保険法がスタートした。社会福祉制度にとっては、措置制度から保険制度の大転換であった。社会福祉制度はこれまでも何度も改革が行われてきた。セツルメントや社会福祉事業等を担ってきた先人たちは、その時の大波を知恵と工夫と先駆性の取り組みで乗り越えて、今日の社会福祉制度を築いてくれた。

今、介護保険が当初の内容から変容している中で、介護の質を保持するためにも施設の経営を安定化することは必然としながらも、新しい地域福祉文化とともに、コミュニティの中の専門的拠点として、地域住民の憩いの拠点として、福祉情報の発信拠点として「施設を社会化」していくことが、先人たちの意に応えることであり、市民活動の流れの中で設立してきたサンフレンズの役割と思う。

設立 20 周年おめでとうございます

社会福祉法人サンフレンズ相談役 岡本 波津子

8 月 24 日、恒例の上井草園納涼祭に参加させていただきました。玄関前の広場のもの静かなたたずまいに違和感を抱きつつふれあいの家ホールへ。ホールでは、きちんと並べられた椅子に座ったご利用者と、付き添われたご家族とで超満員の盛況。何となく例年と違う雰囲気戸惑いを感じていました。プログラムが進むにつれ、職員の皆さんの努力と、ご利用者への配慮を目の当たりにし、胸が熱くなりました。

今まで理事、相談役として、サンフレンズの成長を見守ってきましたが、職員の方々が健康で、毎日が楽しく働けて、ひたすら感性を磨いて下さることを願いながら、今日に至りました。“どうすれば楽しく働ける職場環境が整えられるか？”職員の辞職を聞くたびに悲しい思いをくり返してきました。今更乍らお役にたてず、申し訳ない気持ちで一杯です。

上井草園が開設したばかりの頃、若くて、元気な新入職員は、希望に胸ふくらませ、笑顔が輝いていました。私自身もお仲間に加えていただいたような気分で、バラ色に弾んでいた事を思い出します。杉並区の中央地域松ノ木から、北西地域上井草での新しい事業運営は、全職員の中に緊張と不安、そして将来への抱負と希望が縋い交ぜ（ないませ）になりながら、“杉並の高齢者福祉は上井草にまかせて！”“ここから福祉文化の風を区中に送ろう！”“たくさん発信していこう！”と勝手な決意を打ち上げたりした事なども、なつかしい思い出です。

初心を忘れるなという言葉通り、20 年の歩みは着実に新しい芽を出し育ち始めました。そうです、“困った時の SOS 事業”です。こんなにうれしいことはありません。次期 30 年までに、どんなに成長するか楽しみです。打ち上げた決意が確実な形になり、発展することを心から祈っています。

ホットな心とクールな頭脳

社会福祉法人サンフレンズ理事 河 周子

—介護される側も介護する人も、どちらもが犠牲にならず老後を安心して過ごしたい—

福祉が未整備だった今から 40 数年前。親の看とりでの痛切な介護体験から始まった助け合いのボランティア活動。共感した多数の人々の地道な地域福祉活動の体験から湧き上った「新しい社会福祉法人」の設立運動。サンフレンズは苦節 20 年、国内初の市民立の社会福祉法人の設立に漕ぎつけました。感激でした。それから更に 20 年。法人はさまざまな方からのご協力と努力のおかげで、各種施設を抱える中規模法人に成長することができました。感謝の一言です。

でも、喜んでばかりはいられません。介護保険の施行により福祉の社会資源が増えたとは云え、度重なる改定もあり、法人は未曾有の危機に陥り、再生サンフレンズを目指し、大改革に乗り出すことになりました。

法人の宝である職員が疲弊していないか、それが一番の心配でしたが、先日訪れた上井草園で、若い職員の元気な笑顔に明るい希望をいただきました。

“そんな時に厳しい”と思いつつも職員の方々にお願いしたいことがあります。それは法人の三つの理念についてです。①自由（人権）の尊重、②対等な人間関係、③他者への思い、があげられています。

職場環境が厳しくなった時、ときとしてこの三つの理念を重く感じることはないでしょうか。

でも「今忙しいからできない」ではなく、「今本当に必要なことは何か」と一瞬、振り返っていただきたいと思うのです。大変な時だからこそ「考えて模索する」と「あっ」と思う気付きがあるかも知れません。

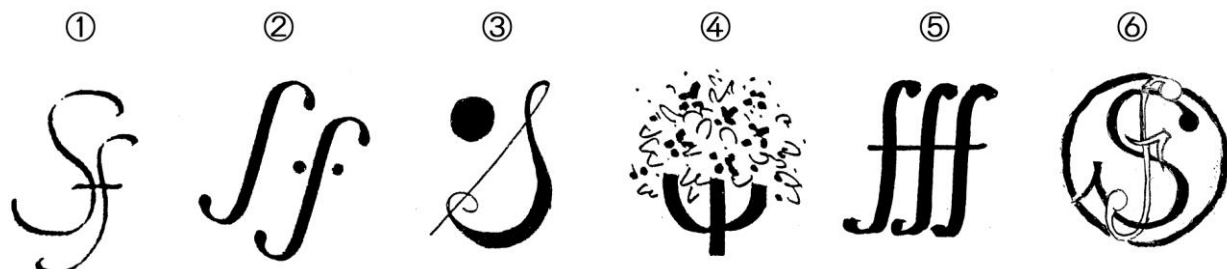
—ホットな心とクールな頭脳を大切に—

初代理事長が職員に諭された言葉です。私の心に今も新しく響く言葉です。

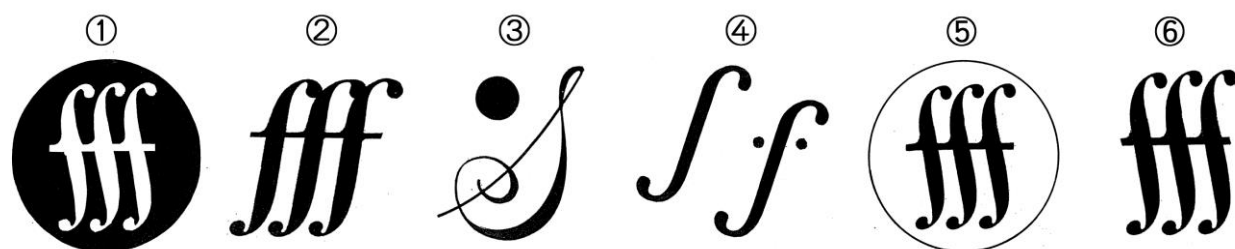


サンフレンズマークはこうして決まった

サンフレンズの「サン」は、法人設立の母体となった3団体『杉並・老後を良くする会』『友愛の灯協会』『新しいホームをつくる会』の「三」、明るく輝く太陽の「Sun」、杉並の「杉」からとられました。サンフレンズマークは、3つのf「フレンズ」が手をつないでいるデザインになっています。この記念誌をつくるにあたって古い資料を紐解いている中、サンフレンズマーク選定委員会の書類が見つかり、このロゴマークが決まるまでのおおよその経緯がわかりました。



デザインは、まずはじめに一般公募しました。数十件の応募があり、第1次選定で約1割に絞って上記①～⑤について第2次選定が行われました。残存していたのは選定委員会にかけられた資料と、そのコピー元原本の2つ。原本のほうには①～⑤に加えて⑥が含まれていますが、その上には白い紙でマスクがかけられており、どうやら委員会直前に外されたようです。資料下部に「サンフレンズマーク選定委員（岡本、河、林、工藤、田中、中村、弓谷、清水(珠)」と記されています。



上記①～④について第3次選定が行われたようです。追加要望があったのでしょうか？第2次選定を通過した3つに加えて、新たに①が追加されています。選定委員会の資料には掲載されていませんが、①の白丸版の⑤、②の垂直版の⑥のデザイン画が残っていました。



最終選定にかけられたのが上記3つ。第3次選定の候補から④が外されました。上井草園と上井草ふれあいの家において利用者様と職員に意見を聞いた結果報告の1997年9月22日付メモによると、上井草園での一番人気は②、上井草ふれあいの家では③、職員に人気があったのは①と、大きく票が割れています。おそらく当時の上井草以外の2事業所（和田ふれあいの家と和泉ふれあいの家）の票により、現在のロゴマークである②に最終決定されたものと推測されます。

なお、決定の段階において、故・河潤之介氏から貴重なご助言をいただきましたことを付け加えておきます。

サンフレンズの歌（三つの友達）

作詞 岡本波津子

作曲 工藤 寛治

編曲 高橋 史子

振付 石毛 栄一

1997年4月、サンフレンズ上井草（上井草園と上井草ふれあいの家）の開設にあわせてつくられました。すべて、役員・職員による合作です。



サンサンサン、サンフレンズ サンサンサン、サンフレンズ

サンサンサン、サンフレンズ サンサンサン、サンフレンズ

一. 草の根をひろげよう 和田堀に 生きつづけよう 住みなれたまちに
みんなで老後を 良くしていこう 歩みつづけて 幾年（いくとせ）か
ランランラン 今、松ノ木からの夢結ぶ 一歩、二歩、三歩 サンフレンズ

二. 芽が出てふくらんで 和泉の里 幸せ願おう 老いも若きも
みんなで一緒に 支えあおう 地域福祉を 育（はぐく）んだ
ランランラン 今、松ノ木からの灯（ひ）がともる ひかりサンサン サンフレンズ

三. 花咲きかおる 上井草 新しいホームを つくりあげよう
区民参加で 自由のまちを 平和の願い 永遠（とこしえ）に
ランランラン 今、上井草発の 輪をえがく 三つの友達 サンフレンズ



社会福祉法人サンフレンズ法人設立 20 周年記念ブック
発行者：社会福祉法人サンフレンズ
東京都杉並区上井草 3-33-10
発行日：2014 年 10 月 19 日